

仙台市青葉区 30代 女性 会社員

直後の判断での買い物が功を奏す

当日は、女性3人で仙台市内の会社(ビルの4階)にいました。

大きな揺れを感じたので、2人を誘導して、携帯電話等を手にし、非常階段で外に逃げました。大きく揺れ動く地面やビルに、OLやサラリーマン達は悲鳴をあげて「嘘だろ?」「やめてー」などと不安を口にしていました。

電話も繋がらない状況で小学校にいる娘と両親の無事を願いながら、私達はすぐには帰らず、停電したコンビニで缶詰やカップラーメンなど保存食をカゴ一杯に買い、3人で分けました。それから3人は解散し、同僚2人は徒歩で自宅へ、そして私は車で名取の自宅にむかいました。

余震がある中、通常30分で移動できる通勤路が大渋滞で3時間かかりました。ようやくたどり着くと母も、父も、娘も無事でした。その一時間後、主人も無事に帰ってきました。同僚2人も無事に帰宅できたことがわかり、ようやく一安心。

今後心がけたい事は、家族の集合場所、食料と飲み物の確保、防寒着の準備、ガソリンを満タンにしておく。電話が繋がらない時の電話以外の家族との連絡方法が何かあったらいいなと心から思いました。

とっさにコンビニで買った大量の食品はライフラインがままならない、その後数日間の、家族の食事の源になりました。同僚2人も直後の買い物が結果、家族を助けることにつながったとのことでした。



仙台市青葉区 20代 女性 会社員



やっと繋がりに実家の家族に無事を伝える

地震が起きた日は、会社にいました。

棚が崩れ、立っているのがやっとの状況のなか、私は言葉が何も出ませんでした。机の下へもぐり、揺れがおさまるのを待ち、外へ出ても余震が続いていました。4トントラックと電信柱が大きく左右に動いているのを見て、この地震の大きさを改めて感じました。

その後アパートに戻り、近隣の方々と避難所で何日か過ごしました。その期間中もずっと青森の実家の家族に無事だよと伝えたくてリダイヤルを押し続けていました。やっと連絡がとれた時には、いろいろな感情が交じり合い泣いてしまいそうでした。

私は直接的な被害が少なく、大変な思いをした方より災害の影響は少ないです。

あれから9ヵ月たちますが、先の見えない仮設住宅で生活する知人、未だ会社、仕事が不安定な方々も沢山いて、まだまだ問題は山積みです。

私にできることは少ないかもしれませんが、被害の大きかった沿岸部に向けたボランティア活動や、この先の生活に不安を抱える知人に向けたできる限りの支援などに積極的に関わっていきたいと思います。





毛布持参でホテルへ避難

お米と炊飯器も持ち込みご飯を炊く

仙台市中心部の高層ビルの中で、就職試験を受けている最中に地震が起きたのです。

階段を下りて外に避難しましたが、ひとりであるのが不安で心細かったため、同じ試験を受けた初対面の女の子と手を取りながら、徒歩で私が住んでいる賃貸マンションまで一緒に帰りました。

携帯電話もメールも不通の中、唯一見ることができたTwitter[※]で阪神淡路大震災の時の教訓に関する書き込みをチェックしながら、街の状況を把握しようと歩いていたら、あるホテルが避難場所として開放されていることを知り、早速ふたりで毛布を持参して向かいました。

非常時電源が確保されたホテルでは暖房や電気もついて暖かだったので、心からありがたいと感謝。

翌日には、恥ずかしい気持ちを強く振り切り、意を決して自宅からお米と炊飯器を持ってきて“炊飯”しました。そのご飯を持って自転車で実家に届けた時、家族が喜んでくれた笑顔がいまでも忘れられません。

震災を経験して感じたのは、情報がとても大切だということ。

あとは生きるうえでの勇気ですね。

恥ずかしいと思うことが、とても小さなことだったのだと身をもって経験しました。

※Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。



松江市 60代 男性 自治会役員



車が通れない真っ白な坂道

消防団員が医療用酸素ポンペを徒歩で届けた

この集落には、持病で医療用の酸素ポンペを使用している人がいました。集落から県道に出るには上り坂を約700メートルのぼらなくてはなりません。そこを上がるのにも、除雪が間に合わず、車では上がれない。高圧線の鉄塔や山の木々が倒れるような雪の降り方でしたからね。結局、その距離を消防団が歩いて運びました。普通に歩けば30分くらいですが、あの日は大変だったと思いますよ。何しろ一面真っ白で、道がわからない状況でしたから。県道だけをきれいに除雪してもらっても、私たちはこの地区から出ることができないのです。ちなみにその酸素ポンペが必要だった方は無事でした。

今回の雪害を機に、この地区にも除雪機を1台配置してもらうことになっています。雪害があってからすぐに県と市町村の話し合いがあり、幹線道路から家々まで除雪の順番を決めたようです。



松江市 60代 男性 自治会顧問



電話が通じず、頼りの消火栓も雪の中

火事の対応に手間取る

平成23年1月2日の午後2時半頃、「火事だ！」と自治会長の私の所へ人が飛んできました。しかし、停電で外部とは連絡が取れず、集落の有線放送も使えない。携帯電話もほとんど圏外でつながらないので、人員を招集するのが大変でした。

家はすでに燃え上がっていました。中に人がいたのですが、壁の方から燃えていったので、火が大きくなるまで気づかなかったようです。オール電化住宅で暖房が使えず、豆炭こたつを使用していましたが、その炭が火元とのことです。

消防車が来るまで、消火器や消火栓で対処していました。しかし、消火栓はみな道路の下にあり、雪が積もっていて場所もわかりませんでした。消防団が雪かきをしましたが、屋根から落ちてきた雪でまた埋まってしまう状態で…。年寄りだけの家は、雪かきをしていないこともあり、仕方ないですね。遠くにある消火栓からホースをつないで消火活動をしました。その日が無風状態だったことが、不幸中の幸いです。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

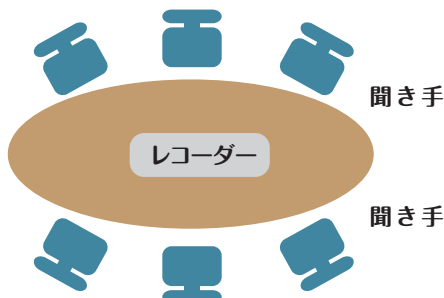
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

